



CENTER NEWS

MARCH 2014

www.ircme.m.u-tokyo.ac.jp



JICA・カンボジア国医療サービス情報収集・確認調査時の写真

Contents

●	2	● 臨床診断学実習（技能実習と共用試験 OSCE）	5
● カンボジア出張報告	2	講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝	
講師 大西 弘高		● 模擬患者つつじの会	5
● 文部科学省委託事業の合同シンポジウム	3	講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝	
教授 北村 聖		● ピカリング先生の活動	6
● フリークォーター／エレクトティブクラークシップ	3	講師 孫 大輔・特任専門職員 三浦 和歌子	
講師 大西 弘高		● ピカリング先生離任ご挨拶	7
● 東京大学医学教育セミナー	4	特任准教授 Joyce Pickering, MD, FRCPC, FACP	
講師 大西 弘高		● チャス先生博士課程修了のご挨拶	7
● 医学教育基礎コース	4	東京大学大学院医学系研究科内科学専攻	
講師 孫 大輔		医学教育国際研究センター 博士課程修了生	
● 学生向け勉強会	5	Dwi Tyastuti, MD, MPH, PhD	
講師 孫 大輔		● センター日誌／編集後記	8

カンボジア出張報告

講師 大西 弘高

今回、JICA カンボジア国医療サービス情報収集・確認調査に、システム科学コンサルタンツ（株）と東京大学の共同企業体において参加した。私の立場は、保健システム2 / 病院管理の専門家であり、派遣は2014年1月12日～1月19日（8日間）と、1月29日～2月7日（10日間）の2回であった。

カンボジアは、第二次世界大戦後長期的な内戦が続き、70年代後半には教師、医者などが虐殺された悲しい歴史を持つ国である。近年は経済発展著しいが、保健指標は依然として厳しい水準にある。現在、保健分野で実施されている人材育成、母子保健、医療機材管理野3つのJICAプロジェクトは、いずれも2014年度内に終了予定である。よって目的は、今後のプログラムを策定するための情報収集と提言である。

上記3つのプロジェクトはミレニアム開発目標（MDGs）が2015年に期限を迎えるため、今後のプログラム策定にはUniversal Health Coverageの実現というポストMDGsの枠組みが重視された。また、安倍首相が後押しする医療パッケージ輸出として、北原国際病院が経営する会社が日揮と手を組み、JICAからの融資も得てプノンペン市内に救急病院を建てる案件も決定しており、ODA事業と民間サービスの連携にも視点を向けることとなった。

まず驚いたのは、医療職、教育職を問わず、医師、看護師などの医療専門職による公的機関と私立機関での業務の掛け持ちが、日常的に

常態化している問題である。これにより、医師だけでなく、看護師も病棟にいない状況が見られる。国立病院では、医師、看護師がケアに際して患者に袖の下を求めるなど、倫理的に問題のある行動が稀でない。

医療システムは、保健省から州保健局、保健実施区域へと地方分権化が進んでいる。ただ、数年前まではcontract outしていた保健実施区域レベルの保健行政に関し、現場にオーナーシップを持たせていくことで、各自が主体性を持って運営できるようになるかどうかは未知数である。州病院には医師はおらず、紹介病院レベルの施設で医師補が活躍している。ただ、上述した掛け持ちにより、紹介病院での医療も住民に期待されず、むしろ私立病院、私立診療所がよりよい医療を提供している印象が目立った。

医師育成機関である保健科学大学（University of Health Science）は、40代前半の新しい学長が1年前に着任し、今後改革に力を入れようである。一方、保健所での医療は多くの場合看護師が担うが、看護教育を提供する技術学校、地域研修センターでの看護教育のレベルは低く、またこれらの教育組織の運営にかなりの問題があることも判明した。



▲ コンボンチャム州の保健所スタッフ

文部科学省委託事業の合同シンポジウム

教授 北村 聖

平成 25 年度文部科学省
先導的・大学改革推進委託事業「医療提供体制見直しに
対応する医療系教育実施のためのマネジメントの在り方
に関する調査研究班」の医学・
看護学・歯学チーム合同シン
ポジウムが平成 25 年 12 月
5 日に東京医科歯科大学鈴木
章夫記念講堂において開催さ
れた。

袖山禎之文部科学省医学
教育課長の挨拶の後、基調
講演として、猪飼周平一橋大
学教授が「ヘルスケア人材供給に関する長期戦略について」と題
して講演を行った。

続いて、シンポジウム 1 では、「地域医療と総合診療」をテー
マに、都筑千景神戸市看護大学教授と草場鉄周北海道家庭医療
学センター理事長の 2 名が講演された。

午後のシンポジウム 2 は、「超高齢社会を見据えた地域医療の
教育」と題して、葛西龍樹福島医大教授と原祥子島根大教授、

平成 25 年度文部科学省 先導的・大学改革推進委託事業
「医療提供体制見直しに対応する医療系教育実施のためのマネジメントの在り方に関する調査研究班」
医学・看護学・歯学チーム合同シンポジウム プログラム

日 時：12月5日（水）10:00～17:50
場 所：東京医科歯科大学 歯学ホール3階 鈴木章夫記念講堂

開会挨拶：丸山 謙之（東京医科歯科大学 学長）
丸山 謙之（文部科学省 高等教育局長） 医学教育課 課長

基調講演：10:30～10:40
「ヘルスケア人材供給に関する長期戦略について」
猪飼 周平 一橋大学大学院社会学部 教授

【シンポジウム1】 地域医療と総合診療 10:40～11:40
「地域医療の発展とヘルスケア人材供給」
都筑 千景 神戸市看護大学 教授、在宅看護学 教授
「総合診療の発展とヘルスケア人材供給」
草場 鉄周 北海道家庭医療学センター 理事長

【シンポジウム2】 超高齢社会を見据えた地域医療の教育 12:00～14:30
「超高齢社会を見据えた地域医療の教育」
葛西 龍樹 福島大学 医学部地域医療学講座（老年看護学）教授
「超高齢社会を見据えた地域医療の教育」
原 祥子 島根大学 医学部地域医療学講座（老年看護学）教授
「超高齢社会を見据えた地域医療の教育」
猪飼 周平 一橋大学大学院 社会学部 教授、東京医科歯科大学 医学教育センター 学長

【シンポジウム3】 総合診療と地域医療 14:30～16:00
「総合診療の発展とヘルスケア人材供給」
丸山 謙之 東京医科歯科大学 学長、東京医科歯科大学 医学教育センター 学長
「総合診療の発展とヘルスケア人材供給」
猪飼 周平 一橋大学大学院 社会学部 教授、東京医科歯科大学 医学教育センター 学長

【シンポジウム4】 これからの医療人の教育マネジメント 16:00～16:55
「これからの医療人の教育マネジメント」
猪飼 周平 一橋大学大学院 社会学部 教授、東京医科歯科大学 医学教育センター 学長

閉会挨拶：猪飼 周平（社会人医学中央大学大学院 医政学専攻 教授、副学長）

▲ プログラム

ならびに曾我賢彦岡山大学准教授の 3 人が講演された。

シンポジウム 3 は「多職種連携教育」をテーマに開かれ、朝
比奈真由美千葉大学講師、大塚眞理子埼玉県立大教授、片岡竜
太昭和大学教授、さらに鶴田潤東京医科歯科大准教授の 4 名が
講演された。

最後の総括講演は「医療における て・あーて」と題して川嶋
みどり日赤看護大学名誉教授がお話された。

患者に寄り添う総合診療医が統一した医学教育の目標の一つと
なり、チーム医療の教育の場として臨床実習、臨床研修、専門研
修のありようについて、医師、歯科医師、看護師の壁を越えて熱
心な議論がなされた。



▲ 総合討論

フリークォーター／エレクトィブクラークシップ

講師 大西 弘高

2014 年 1 月にフリークォーターによる M1 生 3 名、エレクトィ
ブクラークシップによる M3 生 1 名を医学教育国際研究センター
で受け入れた。今回も 1 カ月間でそれぞれが興味深い研究成果を
まとめ、2 月 14 日の発表会も盛り上がった。

M1 佐藤駿一さんは、「教育と医療の接点」というテーマであっ
た。学習や発達に障害を持ち、教室内で問題になる児童が 20 ～
30 人に 1 人いること、現状でそのような児童への対策において医
療側と教育側で連携が十分でないことを指摘した。その背景には、
医療側と教育側の文化が様々な意味で異なるという状況がある。
親や児童自身を通じてしか評価が出来ていないと、医療側と教育
側がいがみ合ってしまう状況も起こりうるため、連携のとれている
事例を広めると共に、学生時代から教育学部、医学部の間で連携
教育を行うなどの案が出された。

M1 杉戸亮介さんは、「プライマリケアの医師が補完代替医療
（CAM）を選択する上で何が障害となっているか？」のテーマで
あった。全人的な医療を実施する上で、現状の医療システムにど
のような問題が立ちはだかっているかについて、CAM に積極的な
プライマリケア医へのインタビューを中心に現状をまとめた。その
結果、① CAM の性質：さじ加減の治療、② 医療者の意識：西洋
医療偏重、③ 教育や保険制度との適合の低さ、④ 地域における要
因：優れた療法家の情報不足といったカテゴリーが抽出された。

M1 高木祐希さんは、「プライマリケア医が患者の『家族』を診
るということの意味」をテーマとした。医師が家族背景を考慮する
と共に、患者ケアに関して家族と協力し合うこと、介護疲れの問題
などにおいて家族自体にも介入することなども必要であるという
現状が示された。

M3 梶原健さんは、「うつ病治療に対するマスメディアの影響」
のテーマであった。うつ病で医療機関にかかる患者が 2000 年頃
から増えていると言われるが、そこにマスメディアがどう影響して
いるかを論じた。うつ病は、2000 年頃に「心の風邪」という用語
がプロモーションに頻繁に使われるようになり、2009 年には「SSRI
による攻撃性増大のリスク」が言われるようになった。医師は、若
い頃は製薬会社や学会、専門家といった外の情報に影響を受けや
すいが、経験が増えるにつれ、患者からのフィードバックも上手く
採り入れられるようになる。2000 年以降内因性に加えて心因性
が増え、特に 20 ～ 30 代の患者が増えたことについて、マスメディアに
うつ病という用語の掲載
数が増えたことも示され、
その因果関係に関して興
味深い議論がなされた。



▲ 研究発表を終え修了証を手にした学生たち

東京大学医学教育セミナー

講師 大西 弘高

医療専門職の教育に関する最新的话题を選んで、ほぼ月例の形で開催しているが、2013年12月には第60回を迎えることになった。第59回からは毎月マギル大学から来て頂いているジョイス・ピカリング先生に様々な観点からの講演を頂いている。特に、第61回、第62回は複数の講演者を交えた形としたが、このようなミニ・シンポジウムの形式も複数の視点からの意見を同時に示すことができる点で有効だろう。

第57回の猪飼先生には、ヘルスケア領域の数十年単位での大きな動きについて、社会学の視点から論じて頂いた。20世紀は病院中心のシステムであったが、21世紀はそこに生活視点を重視したシステムを組み合わせるべきだとのメッセージが分かりやすかった。第58回の山下先生には、米国での家庭医療専門医研修について最新情報を教えて頂いた。PCMH (patient-centered medical home) というプライマリケア重視、慢性疾患モデル、IT利用、多職種協働を採り入れたプログラムが注目されているという。

第59～62回では、ピカリング先生が医学教育認証評価、Key features、保健医療ニーズと医学教育、カリキュラム改革における問題点について紹介して下さいました。医学教育認証評価については、受審側の立場でどのような準備、心構えが必要かが明確になった。Key featuresはカナダで行われている国家試験の一部だが、その意義、作問や採点といった具体的な側面を教えて頂いた。保健医療ニーズについては、渋谷先生が質調整生存年 (QALYs) や障害調整生命年 (DALYs) で表される疾病負荷について解説され、ピカリング先生はそれをカリキュラムにどう反映させるかを説明された。カリ



▲ 第57回セミナー
猪飼 周平 先生

キュラム改革における問題点では、大西講師が日本の医学部カリキュラムの枠組みを解説し、孫講師が東大での改革の現状に触れた。ピカリング先生は、カナダでの例を挙げながら、これら全体をまとめて下さった。

医学教育セミナー（平成25年9月～平成26年2月まで）

- 第57回 9月26日(木) 18:00～19:30 医学図書館 3F333 会議室
講演者：猪飼 周平 先生
一橋大学大学院社会学研究科 教授
テーマ：「ヘルスケアの歴史変動と医師の未来」
- 第58回 10月10日(木) 18:00～19:30 医学図書館 3F333 会議室
講演者：山下 大輔 先生
オレゴン健康科学大学家庭医療学科 助教
サウスウォーターフロントクリニック所長、家庭医療プログラム副研修委員長
テーマ：「米国の家庭医療専門医研修の現状と未来」
- 第59回 11月29日(金) 18:00～19:30 医学図書館 3F333 会議室
講演者：ジョイス・ピカリング 先生
カナダ マギル大学医学部附属病院 医長/医学部医学科副学科長・准教授
東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター 特任准教授
テーマ：「北米での医学部認証評価：概要とその背景」
- 第60回 12月12日(木) 18:00～19:30 医学図書館 3F333 会議室
講演者：ジョイス・ピカリング 先生
東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター 特任准教授
テーマ：「臨床推論能力の試験 - Key Features - 概要と有用性」
- 第61回 1月15日(水) 18:00～19:30 医学図書館 3F333 会議室
講演者：渋谷 健司 先生
東京大学医学部医学系研究科 国際保健学専攻国際保健政策学教室 教授
ジョイス・ピカリング 先生
東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター 特任准教授
テーマ：「卒前教育カリキュラム開発に対する保健医療ニーズからのアプローチ」
- 第62回 2月18日(火) 18:00～19:30 医学図書館 3F333 会議室
講演者：ジョイス・ピカリング 特任准教授、孫大輔 講師、大西弘高 講師
東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター
テーマ：「カリキュラム改革に伴う問題点：授業時間、単位制、そしてアウトカム
基盤型教育」

医学教育基礎コース

講師 孫 大輔

2011年度から始まった医学教育基礎コースは、本学医学部の Faculty Development (教員能力開発) の一環として、主に新任の医学部教員や病院指導医を対象に、実践的な教育法について学べるコースを実施している。2013年度は表のように全10回のセッションを予定し、一通り受講することで教育理論の基礎から効果的な教育実践法、応用的なテーマまで学べるようになっている。講義のみでなく、グループワークやロールプレイなど協同型学習を盛り込んだ90分のセッションである。

	日時	テーマ	講師
第1回	2013.5.14	よい教員の資質：教育理論との関連	大西
第2回	2013.6.28	学習者との対話から見えるもの ～ニーズ評価と目標設定を中心に～	春田
第3回	2013.7.30	魅力あるレクチャーの方法	北村
第4回	2013.9.17	フィードバックとリフレクション	孫
第5回	2013.10.15	臨床能力の評価	大西
第6回	2013.11.18	MCQ形式の問題の作成の仕方 ～国家試験方式の良問を作りたい～	北村
第7回	2013.12.17	インストラクショナル・デザイン	孫
第8回	2014.1.24	臨床推論の教育	大西
第9回	2014.2.17	プロフェッショナリズムの教育	北村
第10回	2014.3.18	情動・コミュニケーションの教育	孫

一部内容を紹介しますと、第4回の「フィードバックとリフレクション」では、一対一教育における有効なフィードバック法（記述的に、具体的に、限られたポイントで等）や5マイクロスキル（1分間指導法）を説明し、またSEA (Significant Event Analysis) 形式でのリフレクション法などを紹介した。第7回の「インストラクショナル・デザイン」では、教育実践の効果と効率と魅力を高める教育工学のエッセンスを紹介。授業設計では学習の目標・評価・方略の3つを三位一体で考えること、ニーズ分析と学習者分析、ガニエの学習成果の5分類、形成的評価と総括的評価、参加者の学習意欲を高めるARCSモデルなどについて解説した。第9回および第10回は、プロフェッショナリズム教育やコミュニケーション教育など、より挑戦的なテーマを取り上げている。

毎回10～20名前後の参加があり、学内のみならず学外の教員、指導医が参加し好評を得ている。今後も毎年継続して実施していく予定である。



▲ 「インストラクショナル・デザイン」
についての講義（孫講師）

学生向け勉強会

講師 孫 大輔

東京大学臨床推論勉強会

東京大学臨床推論勉強会は、臨床推論の基礎から各症候についての診断プロセスを学べる当センター主催の勉強会であり、毎年診断学実習が始まる学部4年生を中心として希望者が参加している。2013年は1月より学部3年生（新4年生）を対象として開始し、11月までで計18回開催し、毎回10～15名の学生（のべ150名）が参加した。

2013年度は、参考書としてローレンス・ティアニーの「聞く技術—答えは患者の中にある」（日経BP社）を主に用い、1回につき1つの症候を取り上げた。前半は学生自身に症候に関する知識をまとめたものをプレゼンさせ、教員（孫）が適宜解説をした。後半は症例ベースで、最初は学生と教員で模擬面接を行い、その後情報収集から実際にどのように診断にいたるかというプロセスについて具体的に解説した。11ヶ月間で「呼吸困難」「記名障害」「浮腫」「発疹」「咽頭痛」「頭痛」「めまい」「失神」「胸痛」「腰痛」「腹痛」「不眠」「発熱」の症候をカバーした。臨床推論のパターン（仮説演繹法、パターン認識、徹底検討法）を意識しながら、症候ごとに鑑別する上でのポイントを学び、また具体的にどのように患者に問診すれば良いかも学べるように工夫した。今後も毎年、本勉強会を継続していく予定である。



▲ 臨床推論勉強会での身体診察の練習風景

東京大学プライマリ・ケア研究会

医学生を主な対象として、大学のカリキュラムでは学ぶ機会の少ないプライマリ・ケアや総合診療、家庭医療について継続的に学びを深めて行く勉強会を2013年より新たに開始し、月1回で定期開催している。参加対象は学内・学外の医療系学生としており、毎回10～30名ほどの関心の高い医学生や看護学生などが参加している。本研究会によってプライマリ・ケアの重要性や面白さに気づき、学びを深める学生が増えることを期待している。

回	日時	タイトル	講師	人数
第4回	2013.4.23	国境を越えた医師からのメッセージ ～君も“越境”してみないか?～	中川崇 (国境なき医師団)	46名
第5回	2013.5.22	英国総合診療医に聞く：英国のプライマリ・ケア	澤憲明 (英国総合診療医)	23名
第6回	2013.6.24	世界のプライマリヘルスケアと医療政策	森雄一郎・上野諒 (東京大学医学部)	13名
第7回	2013.7.24	日本の家庭医療とプライマリ・ケア	藤沼康樹 (生協浮間診療所)	17名
第8回	2013.9.25	新しい専門医制度と総合診療医	孫大輔(当センター)	10名
第9回	2013.10.23	プライマリ・ケアと緩和ケア	大石愛 (生協浮間診療所)	16名
第10回	2013.11.26	ピカリング先生と学ぶ世界のプライマリ・ケア～プライマリヘルスケアの有効性～	ジョイス・ピカリング (マギル大学)	11名
第11回	2014.1.14	プライマリケアの研究ってどんなもの?	ジョイス・ピカリング	9名
第12回	2014.2.15	質問紙調査研究入門～質問紙の作り方から共分散構造分析まで～	孫大輔(当センター)	10名

臨床診断学実習(技能実習と共用試験OSCE)

講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝

「シミュレーターを用いた技能実習」は当センターが直接担当している実習である。眼底鏡および耳鏡を使った診察法や、バイタルサイン測定、胸部聴診、末梢血管採血のシミュレーターを用いた身体診察法や採血手技を学ぶ機会を提供している。眼底鏡・耳鏡および胸部聴診はOSCEの課題となる可能性がある手技であり、重要な学習機会となっている。また採血手技は大変人気があり、実習の最後に一対一で全員が成功するまで指導を行っている。

共用試験OSCEは、2013年12月14日に実施した。医学科4年生109名が、6つのステーション（医療面接・頭頸部診察・胸部診察またはバイタルサインの測定・腹部診察・神経診察・救急）の試験を受験した。OSCEは本年度より5年生進級の要件となったが、受験者全員が無事に合格することができた。当日はステーション・リーダー、評価者として教員56名（うちセンター教員1名を含む）、模擬患者52名（医学科3年生・5年生、模擬患者つつじの会）、OSCE教務委員1名、医学部事務28名、センター教職員3名が運営に携わった。運営面での改善、当日配布資料の改訂など毎年改善を加えており、円滑な運営ができるように努めている。



▲ 採血シミュレーターを指導する孫講師

模擬患者つつじの会

講師 孫 大輔・技術補佐員 澤山 芳枝

模擬患者つつじの会では2か月ごとに定期勉強会を開催している。2013年9月には、よりリアルな患者を演じるために、俳優の小野田氏を外部講師として招いて演技の理論について学び、場面設定に合わせて即興で演じる「エチュード」というものを体験した。「体を動かすことが楽しい」、「別人になるヒントが得られた」など好評であった。また2014年1月に開催された岐阜大学MEDC主催の第51回医学教育セミナーとワークショップ「SP大交流勉強会」では、全国より集まった約40名の模擬患者に対し、孫がこのエチュードを指導した。

2013年11月には、新作シナリオの「認知症」にてロールプレイを行った。通常演じている初診の急性疾患の設定と異なり、今回は慢性疾患であり、また患者が認知症のため症状をうまく伝えることができないという難しい内容である。認知症に対する関心が元々高かったこともあり、模擬患者さんは、どなたも楽しみに演じられていた。

現在つつじの会会員は28名であるが、今年2年ぶりに新会員（第5期生）を募集することとした。現在男性会員がわずか2名であり、男性模擬患者の増員が期待される。2014年4月から、第5期生に対する新規養成コースを開講予定である。



▲ 「エチュード」を体験する模擬患者

ピカリング先生の活動

講師 孫 大輔・特任専門職員 三浦 和歌子

クリニカルケースカンファランス

2008年度より開催している外国人教員による Clinical Case Conference は、北米型の本場の臨床推論が学べるケースカンファランスとして、附属病院の研修医・若手医師や学部生を対象として継続して開催し、好評を博してきた。今年度はジョイス・ピカリング先生に指導していただくシリーズを、2013年11月より2014年3月まで全9回で開催した。昨年度同様、ランチタイムの12時～13時に入院棟1階のレセプションルームにて開催し、毎回20名前後の研修医や学生が参加した。

ピカリング先生の臨床推論カンファランスのスタイルも、すぐに検査に頼るのではなく、主訴および病歴、バイタルサイン、身体診察から得られる情報を大事にして幅広く鑑別診断を考えて行き、1つ1つの診断仮説について可能性を検討していく仮説演繹法のアプローチであった。また、診断だけを考えるのではなく、次に何をすべきかマネジメント上の優先順位をつけることの重要性も強調していた。例えば、意識障害のある細菌性髄膜炎疑いのケースでは、血液培養を採取したら、頭部CTや腰椎穿刺よりも前に直ちに抗菌薬の投与を始める、などである。2014年度以降も、救命救急センターおよび総合研修センターの御協力のもと、客員教員による臨床推論カンファランスを継続していきたいと考えている。

ミステリーケースセッション

「ミステリーケースセッション」は、ジョイス・ピカリング先生によって始まった新しい形式での臨床推論が学べる勉強会である。毎回15～20名ほどの学生（学部3年生～6年生）が参加しており、2013年11月～2014年3月の期間で全9回を予定している。

「ミステリーケースセッション」では、学生1人が模擬患者となっており、ある疾患の症状や所見を事前に把握しておく。ピカリング先生やその他の学生は診断を知らない状態で、模擬患者（学生）に問診を進めて行き、診断に至るまでの推論プロセスとともに学ぶという内容である。第1回（2013.11.11開催）は「四肢の脱力」が主訴の65歳男性で、診断は遠位尿細管性アシドーシスによる低カリウム性ミオパチーであった。第2回（2013.11.25開催）は「発熱と発疹」が主訴の22歳男性で、診断はHIV陽性EBV感染症のケースであった。第3回（2013.12.16開催）は、「視力障害と難聴」が主訴の65歳女性で、診断は多発血管炎性肉芽腫症のケースであった。

進め方は、最初は主訴と年齢・性別だけの情報で、参加者に1人ずつ鑑別診断を聞いて行きながら鑑別診断を10以上挙げる。次に模擬患者に症状の経過を少しずつ聞いていき、その付加情報で鑑別診断1つ1つについて可能性が高くなったか低くなったかを検討する、いわゆる仮説演繹法のパターンによって推論を進めて行く。総合内科医たるピカリング先生の広汎な臨床の知識が披露され、参加者が舌を巻く瞬間である。教科書を読むだけでは獲得することのできない、深い臨床経験に裏打ちされた本物の臨床推論能力があることを学生は知り、感銘を受けているようである。

臨床疫学コース

「臨床疫学コース」は、2013年度の客員教員ジョイス・ピカリング先生が新たに始めた臨床疫学に関する系統的な講義シリーズ

である。「臨床疫学－EBM実践のための必須知識」(フレッチャー & フレッチャー)を参考書として、臨床疫学の基本原理から統計学的方法論まで、全9回の講義で学べる内容となっている。各診療科の大学院生や指導医、学部教員など20数名が熱心に受講している。各回の終わりには課題が出され次回までの提出が義務づけられており、最終回には試験もある。このコースで学んだことを臨床上の意思決定や、論文の批判的吟味に活かすのみならず、今後自ら臨床研究をやる際に体系的な基礎知識として活かされることを受講者に期待している。

学外での活動等

以上のような教育活動の合間を縫うように、学外への訪問も積極的に行われた。2013年11月には「医学教育学会視察と討論の会」で長崎・五島列島における地域医療視察に参加され、ご自身の関心から隠れキリシタン史跡なども見学された。認証評価が扱われるセミナーやワークショップには必ず出席し、本学と北海道大学ではそのテーマでの講演を行っている。2015年2月に予定されている認証評価を控えた本学にとって認証評価を知り尽くした先生を招聘できたのは幸運であった。

また、プライベートでは、日本の包丁を大変気に入られたようで、筆者らと東京・台東区のかっぱ橋道具街に赴き、ご家族や友人用に4丁ほど買い求めておられた。湯島天神の節分豆まきにも裨着用で参加した(写真)。また、ピアノを嗜まれる先生は学内のピアノの練習場所で、バッハの作品などを練習していらしたようである。何より印象に残るのは、少女の頃から変わらないのではと思えるその笑顔で、同僚スタッフは和やかにこの半年足らずを共に過ごすことができた。



▲ ミステリーケースで指導するピカリング先生



▲ 湯島天神で豆まきをするピカリング先生

ピカリング先生離任ご挨拶

特任准教授 Joyce Pickering, MD, FRCPC, FACP

I am struck by how wise Dr. Kimitaka Kaga and Dr. Shunichi Fukuhara were, to establish a visiting professorship in medical education at the University of Tokyo. I am honoured, not only to have the privilege to spend 6 months at this world renowned institution, but to follow a list of illustrious, internationally acclaimed medical educators. Their varied backgrounds and talents have contributed to making medical education in Japan and particularly at the University of Tokyo, linked to cutting edge medical education world-wide. My contributions here have been in discussions and presentations regarding the new requirement for the accreditation of medical schools, teaching a course in clinical epidemiology, teaching clinical reasoning sessions to medical students and continuing the excellent clinical case conference series with Drs. Gunshin and Son. The monthly International Research Centre for Medical Education (IRCME) seminars have been on Accreditation for Japanese Medical Schools, Key Features Testing for Clinical Decision Making, Needs Based Medical Education (with Dr. Kenji Shibuya) and Practical Issues in Medical Curricular Reform (with Drs. Onishi and Son). I have had, or will have, the opportunity to present as well in the Goto Islands, Niigata, Sapporo and Kyoto. I have learned something about the functioning of the Japanese health care system, which many would consider among the best in the world, and about the rich Japanese culture. My colleagues at the International Research Centre for Medical Education, Dr. Yamamoto, Dr. Kitamura, Dr. Onishi, and Dr. Son have been generous with their time, and patient with my Japanese. I look forward to ongoing collaborations with the many scholars that I have met here in Japan.



▲ 湯島天神の節分豆まき行事に参加

チャス先生博士課程修了のご挨拶

東京大学大学院医学系研究科内科学専攻
医学教育国際研究センター 博士課程修了生
Dwi Tyastuti, MD, MPH, PhD

I extend my sincerest appreciation to IRCME for taking me as a first PhD student and also for introducing the new concept, Interprofessional Education (IPE), that encouraged my thinking. IPE is a great concept and the implementation of this concept is challenging. I am a lecturer from Syarif Hidayatullah Islamic State University, Jakarta and my specialty is community medicine. Referring to my background, I developed an IPE model that related to the condition in Indonesia, and it is called as COMIC Program (Community-based Interprofessional Collaboration). This study focused on community because primary health care has been developed into major health services in Indonesia and this program will encourage health providers to work with other non-health professionals in the community such as paraprofessionals, community volunteers and indigenous workers (Islamic scholars, traditional birth attendances, non-registered nurses, etc.) who have unique roles in supporting the health programs in Indonesia. The participants in my study were students from different professions (medical, nursing, pharmacy, and public health) and the study showed the significant improvement on knowledge, attitude and behaviour related to IPE competencies. This program is a unique and valuable learning opportunity that will be repeated with some modification in the future and can be applied for health professions at the primary care and hospital settings.



9 SEP	
6日(～11月29日)	M2 PBL チュートリアル教育
7日(～14日)	JICA モンゴル国日本モンゴル教育病院整備計画準備調査第1次現地活動(北村)
17日	「模擬患者つつじの会」定期勉強会・健康講座
17日	平成25年度第4回医学教育基礎コース「フィードバックとリフレクション」(孫)
26日	第57回東京大学医学教育セミナー「ヘルスケアの歴史変動と医師の未来」(猪飼 周平先生 一橋大学大学院社会学研究科教授)

10 OCT	
7日(～12月9日)	臨床診断学実習(臨床技能実習)
9日(～12月11日)	臨床診断学実習(第2回医療面接実習)
9日(～11月13日)	臨床診断学実習(New England Journal of Medicineを用いた診断推論)
10日	第58回東京大学医学教育セミナー「米国の家庭医療専門医研修の現状と未来」(山下 大輔先生 オレゴン健康科学大学(OHSU))
16日	ジョイス・ピカリング特任准教授(カナダマギル大学医学部医学科副学科長・准教授)着任(2014年3月28日まで)

11 NOV	
3日(～11日)	チリ アタカマ天文台視察、東大フォーラム2013出席(北村)
6日	東京大学医学部共用試験OSCE説明会
12日	平成25年度第2回運営委員会
12日	「模擬患者つつじの会」定期勉強会・健康講座
18日	クリニカルケースカンファレンス第1回(ピカリング)(3月17日まで全9回)
18日	平成25年度第6回医学教育基礎コース「MCQ形式の問題の作成の仕方～国家試験方式の良問を作りましょう～」(北村)
21日(～22日)	日本医学教育学会 地域医療・多職種連携教育委員会「長崎県五島での離島医療教育視察と討論の会」出席(北村、ピカリング)
29日	第59回東京大学医学教育セミナー「北米での医学部認証評価：概要とその背景」(ジョイス・ピカリング先生 東京大学医学教育国際研究センター 特任准教授)

12 DEC	
5日	平成25年度 文部科学省先導的・大学の改革推進委託事業 医療提供体制見直しに対応する医療系教育実施のためのマネジメントの在り方に関する調査研究 医学・看護学・歯学チーム合同シンポジウム
6日	臨床疫学講座(ピカリング)(3月14日まで全10回)
12日	第60回東京大学医学教育セミナー「臨床推論能力の試験－Key Features－概要と有用性」(ジョイス・ピカリング先生 東京大学医学教育国際研究センター 特任准教授)
14日	東京大学医学部共用試験OSCE実施
17日	平成25年度第7回医学教育基礎コース「インストラクショナル・デザイン」(孫)

1 JAN	
8日	東京大学医学部共用試験OSCE再試験
12日(～19日)	JICA カンボジア国医療サービス情報収集・確認調査第1次現地活動(大西)
15日	第61回東京大学医学教育セミナー「卒前教育カリキュラム開発に対する保健医療ニースからのアプローチ」(ジョイス・ピカリング先生 東京大学医学教育国際研究センター 特任准教授・渋谷 健司先生 東京大学医学部医学系研究科国際保健学専攻国際保健政策学教室 教授)
24日	平成25年度第8回医学教育基礎コース「臨床推論の教育」(大西)
25日(～29日)	JICA モンゴル国日本モンゴル教育病院整備計画準備調査第2次現地活動(北村)
29日(～2月7日)	JICA カンボジア国医療サービス情報収集・確認調査第2次現地活動(大西)

2 FEB	
4日	「模擬患者つつじの会」定期勉強会
17日	平成25年度第9回医学教育基礎コース「プロフェッショナリズムの教育」(北村)
18日	平成25年度第3回運営委員会
18日	第62回東京大学医学教育セミナー「カリキュラム改革に伴う問題点：授業時間、単位制、そしてアウトカム基盤型教育」(ジョイス・ピカリング先生 東京大学医学教育国際研究センター 特任准教授・大西講師・孫講師)
24日	平成25年度第2回クリニカルクラークシップ指導医養成講習会

編集後記

日増しに春らしい陽射しが感じられる季節となりました。2013年4月より新体制となり、新たな気持ちでの1年となりました。今月号も東大内外、モンゴル、カンボジアと日本と海外に渡るセンターの様々な活動報告をお届けできたこと、日頃の皆様のご支援・ご協力に心より感謝いたしております。

次号は秋頃のお届けとなる予定です。たくさんの実りある活動報告となるよう、センター一同、暑さ寒さにも負けず、日々邁進していきたいと存じます。引き続き、どうぞ宜しくお願い申し上げます。(山)



▲ モンゴル相撲のモニュメント

発行元

発行 2014年3月20日
 発行人 山本 一彦
 発行所 東京大学大学院医学系研究科附属
 医学教育国際研究センター
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
 医学部総合中央館2F
 TEL.03-5841-3583 FAX.03-5841-0254
 E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp
 http://www.ircme.m.u-tokyo.ac.jp
 印刷所 株式会社トライ